

〔巻頭言〕

家族とともに歩む看護を育てる—看護基礎教育のこれからに向けて—

長戸 和子

患者を取り巻く生活背景や意思決定の過程、療養の継続には家族の存在が深く関わっており、看護職が家族に目を向けることは質の高いケアを実現するうえで欠かせない。しかしながら、日本の看護基礎教育における家族看護の位置づけ、教育の展開は必ずしも体系的・統合的とは言い難い現状がある。多くの場合、家族に関する内容は各領域の講義や臨床実習の中で部分的に扱われており、教育課程全体を通して一貫した家族看護の学習機会が十分に整備されているとはいえない。

国際的には、International Family Nursing Association (IFNA) が家族看護教育に関するポジションステートメントを示し、すべての看護師が家族志向のケアを提供できるよう、基礎教育段階から家族看護の知識・態度・実践能力を体系的に育成することの必要性を提言している。日本においても、令和6年度に改訂された看護学教育モデル・コア・カリキュラムの中に、家族をケアの対象として理解し、家族と協働して看護を実践する視点が明示された。家族の構造や機能、発達段階の理解、家族アセスメント、家族への支援の計画と評価などが学修目標として示されたことは、日本の看護基礎教育において家族看護をより明確に位置づける契機として大きな意義を持つ。

しかし、これらの理念を教育の実践として具体化するには、なお多くの課題が残されている。本学会が実施した家族看護教育に関する調査(2016)では、家族看護を独立した科目として開講している教育機関は限られており、教育内容や方法にもばらつきがあることが示された。その後の全国調査(田久保ら, 2024)でも、家族看護に関する教育時間の不足、担当教員の専門性や確保の困難さ、教育方法の

共有の難しさなど、実施上の課題が指摘されている。モデル・コア・カリキュラムに家族看護の内容が明示されたことは重要な前進である一方で、その理念を各教育機関の教育課程の中で実質化していくためには、さらなる工夫が求められる。

今後、看護基礎教育において家族看護をより実質的に位置づけていくためには、教育課程全体の中で家族看護の視点を統合していけるようなカリキュラム設計の工夫が不可欠である。家族看護を特定の科目として扱うだけでなく、基礎看護学、在宅看護学、成人看護学、小児看護学など各領域の学修の中で一貫して扱うことにより、学生が看護実践の中で自然に家族を捉えられるようにする必要がある。また、事例検討やシミュレーション、家族面接演習など多様な教育方法の工夫も重要である。

こうした課題に向き合ううえで、学会の役割は小さくない。本学会教育促進委員会では現在、看護基礎教育における家族看護教育のあり方について検討を進めており、基礎教育段階で学生が身につけるべき家族看護の知識・視点・実践能力を整理するとともに、それらを育成するための具体的な教育内容や教育方法について議論を重ねている。教育実践の知見を共有し、家族看護教育の質の向上に資する提言を発信していきたいと考えている。

家族とともにある看護を実践できる看護職を育成することは、これからの社会においてますます重要であり、家族看護の理念を教育の現場に着実に根づかせていくことが求められている。本学会としても、研究と教育実践の蓄積を基盤に、看護基礎教育における家族看護教育の具体化に向けた取り組みを進めていきたい。